

クジラ鯨をめぐる知識・技術の継承とコンフリクト（仮）

林 耕次（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・特任研究員）

要旨

日本では古来より各地で捕鯨がおこなわれ、鯨食の習慣がある地域では、特有の食文化が発達してきた。もともとは持続的な捕鯨業維持のために大型鯨類の世界的な資源管理を目的とした国際捕鯨委員会（International Whaling Committee; IWC）だが、1970年代からは、捕鯨国と反捕鯨国の対立が顕著となった。科学的な調査結果に基づく日本の捕鯨業の再開・継続はIWCにおいて否定的な見方も多くみられ、2019年6月に日本はIWCを脱退して独自の路線で商業捕鯨を再開する決定をした。

他方で、IWCの管轄外である日本沿岸地域での小型鯨類を対象とした捕鯨業、あるいはイルカ漁は、地域環境に基づく猟/漁法、対象鯨種であり、食文化の点においても地域住民の嗜好が強く反映していた側面がある。ただし、IWCが設定した捕鯨モラトリアム（1985年～）期間には大型鯨類の肉に代わる鯨肉の供給源としても役割を担ったことが指摘されており（遠藤 2012）、鯨肉文化の現状については改めて整理する必要があるだろう。また、太地町のイルカ追い込み漁については、2009年に公開された『ザ・コーヴ（The Cove）』がイルカ漁を批判するプロパガンダとして注目されたことにより、国内外で多くの議論が展開された。筆者は、1996年に初めて太地を訪れて以来、1997年から1998年にかけて、短期的な調査を継続的におこなってきた。当時は、『ザ・コーヴ』の撮影/上映前後のような騒動はなく、漁の現場に立ち会いながら、従事者や関係者にも比較的気軽に話を聞くことができたのだが、近年では太地の状況も一変した。

本章では、1997年－1998年当時の太地におけるイルカ追い込み漁を軸とした調査資料を振り返りながら、クジラやイルカを介した人々の知識や技術がどのように受け継がれ、また反捕鯨やイルカ漁批判に対して、どのように対峙しているのかを検証することで、人と人との相互理解の可能性について論じる。

参考文献

- 赤嶺 淳（編著）（2023）『クジラのまち 太地を語る 移民、ゴンドウ、南氷洋』英明企画編集
- 遠藤愛子（2012）「変容する鯨類資源の利用実態—日本の鯨肉流通について」岸上伸啓（編著）『捕鯨の文化人類学』成山堂書店
- 岸上伸啓（編）（2020）『捕鯨と反捕鯨のあいだに 世界の現場と政治・倫理的問題』臨川書店